

熊本	一、五八〇、二五〇	一六一、五一〇	△	四一三、八三三	△	一七〇、〇七五
大分	一、〇九一、六二二	六五、九一二	△	三五二、五九〇	△	一〇七、〇三二
宮崎	七四二、〇三〇	四九、四九〇	△	二六四、三二七	△	二二九、三〇〇
鹿兒島	九〇八、九四一	七三、九九一	△	五四九、八三六	△	四一六、七九三
沖繩	一一三、九三五	八七五	△	一三、九〇七		三八、九九八



## 作物を友として…… 朝から晩まで

行方方郡武田村  
統計調査員 境 勇

して居る田や畑などの地が頭の中に浮び来て、實地と圖形と合致するなど一種の趣味をすら感ずるのであります。

今回茨城統計協會の設立と共に「茨城統計」の發刊せられました事は、吾々調査員の誠に欣快とし、本誌の益々發展せられん事を切望して止まない次第であります。

いといつてよからう。例へば米生産統計調査にしても、彼の何十枚かの字切見取り圖を製圖するに當りて、此所が池、川、道路、宅地、畦畔、田、畑、原野、山林、何々小字、是れから是れが何々大字よりの飛地、何番から何番と各筆毎に地番の打具合、又は小字の此所から彼所に入り込み具合など、入念に調べつゝ製圖する時には、日常接見

農家經營世帯主の作付反別を調査するに當つても先づ稻の出來具合を、區内全般の田圃を經巡りて視察し某氏の作りは上作、某君の作柄は下作と上中の作別を見定めて補助表を作製し、而して是れ等の標準地を選定、粳糯別々即ち六ヶ所に各等別の坪刈旗を立て適當期是等を刈り取りて各々別々に乾燥し、一升の量を調査して見る時は、概して一坪の粳全量に於て少く、下作地の産粳の方が一升の量に於て多く、中作上作と云つた様に總量に於て多き

ものに比して其の重さの反比例する事に實感しました。

云ふ迄もなく米としての量は一升に付き、其の目方の重い下作産粳の方が粳摺歩合が多く即ち米の量が多くなります。又粳粳に比し糯粳の方が量重の共に少き事は亦云ふ迄もありません。

此の例は旱水の被害粳、又は旱、水害を少しでも受けたと思ふ粳意外の、水利共に適當にして刈り取りも適期なりし物を指示するものです。勿論旱水被害地の産粳は非常に量重少く是れは例外です。

吾等は實地体験調査研究の結果坪刈に得たる各作計數に依つて何反何畝何歩と各作別に算出調査の結果を統計報告するものなれば、創刊號紙上に論議されてありましたやうに本縣産米豫想收穫高に付き、他方面から批難の聲を見た様ですが、吾々調査員としては最善の努力と研究心を以て眞剣なる調査

報告をなしたのに、斯くの如き聲を耳にするのは誠に遺憾とする次第であります。

此の意味に於て我等の本縣統計課長川崎末吉氏の御説、且つ又關本町役場内池田穰氏の御説共に結構な吾意を得たる御説と歡讀致しました。同職に有る諸君共に統計思想普及の爲め大いに力説宣傳せられん事を希望致します。

決して吾等は机上や聞取り空想等を以て、職に従事するものではありません、日々田畑に朝から晩まで作物を友として居る者です。

殊に本村は青年農を以て調査員に指名され、皆農事改良研究に心を盡し居り、競ふて稻作麥作立毛品評會に採種改良實行に、近代叫ばれつゝ有る農村振興、共存共榮の爲め米麥作多收穫、品種改良に各々向上心を以て村發展に微力乍ら献身努力致しつゝ有る者です

幸ひ事務上に於ては行方方郡統計事務所研究會長小貫三郎氏が本村統計主任の爲め、同氏指導の下に大いに研究討檢し、統計の完璧を期したいと各員熱心に勉強してをるのです。

かくして各區の統計が集つて一村統計と成り、一村集つて一郡統計と成り

### 兩部長を顧問に

統計協會では先頃の總會において左記兩氏を顧問として推薦した

經濟部長 柴山 博氏  
警察部長 八田 三 郎氏

一郡集つて一縣統計と成り、一縣集つて國家統計と成るのでありますから、何卒本務意外の諸氏も統計なるものを諒とせられ、冀くは吾等の國家的使命を益々鞭撻助長せしめられん事を熱望致します。

# 優遇の途を圖れ

新治郡 荻穂村書記 岡野 道孝

統計の使命のいよ／＼重大なるに鑑み筑東山根部會にも統計事務研究なるものが生れた、言ふ迄もなく各町村協力し以つて統計事務の向上發展を期する目的の爲めで、去る二月十二日午前九時よりわが新治郡荻穂村役場に第三回の研究會を開催した、折り悪しく降雪の日にも不拘一町七ヶ村の主任者全部出席し、先づ第一に二月分報告物につき生産物の單價の決定より製表其他統計事務の取扱方、統計調査員の指導訓練の方法等の研究をとけ午後三時意義ある本會を閉じたが、國家の基礎たるべき統計は一に調査員の活動にある、言ふ迄もなく調査員の撰擇が最も肝要である。従來の統計はやゝもすれば形式的數字の連記に過ぎず全く空虚なものであつた、之れ調査員の活動不充

分のためであるといつても過言ではなからう、然して一面また手當の薄きによるともいへる、今後大いに此点に注目し町村財政の許す限り或程度迄優遇

し以つて其の活動を充分ならしむると共に主務者の熱と責任感を高める必要があると思ふ。

## 投稿 歡迎

- 一、種類に制限ありません(論説、所感、體驗實記、質疑、文藝、其他)揮つて投稿されたい、佳作には賞品を呈します。
- 一、用紙は成るべく原稿紙とし文字は明瞭に書かれたい。
- 一、原稿には住所氏名を明記すること  
(但し誌上の匿名は支障ありません)
- 一、原稿の取捨採否は編輯部に一任されたい。
- 一、第三號は四月二十日迄に送付のこと
- 一、原稿は一切返送しません
- 一、宛名は「茨城縣廳統計課内茨城縣統計協會編輯部」宛のこと



## 歌短

### 丹 四郎選

うかららとはなれて食ひぬ腹痛みてわが食ふかゆの味に親しむ  
世の不景氣はおもはず末梢神經の異常昂奮を求めつゝ淺草六區人雪崩うつ

和田 芳實

さし持ちて米を噛みふるる忠二郎が眼鏡も眉も襟ほこりなり

佐藤 正一

帳面つけにことをかまへて本を讀むあはれによしとひとりうべなふ

關 明

廣告氣球まろ／＼照らふ空の光はりつめて居れどわれはひとりかも

新野 貴美子

鼻を覆ふ氷囊の冷えを感じねば手を觸れて見ぬその氷に

石井 勇

ひゞわれしもう手握りて夕べにはなけかう妻をいたはりには

渡邊 重雄

苦しみつゝ見榮張る人の心理解しがたけれど吾れにもあるなり

雨野 洋夫

明滅するネオンサインに都市中心主義の威壓を感ず

黒田 正紀

險しき現實の社會に生き徹さむ氣魄もたむとして日々苦しむ  
夜ふけて我が濕布替ふと湯を沸かす妹のころにふれてをるなり

根 矢 勇 夫

父あらば父があらばと思ひすぐし來し世のつれなさはころに沁みぬ

沼 田 清

酒庫の壁に日ざしは伸び至りそこにある兒ら着ぶくれて見ゆ

中 野 桃 水

里の田も刈るべくなりぬ坪刈の旗立ちてより久しと思ふに

今 泉 安 之 助

おのづからころ勢いて刈る稻の直かるべき統計ぞこれは

境 勇

そよとだに吹く風もなし西山の聖魂たゞよふ大き閑けさ

四 郎

### 統計短歌

丹 四郎選

次回 課題 「春雜詠」 五首以内

宛名 茨城縣廳内統計協會

締切 四月二十日



俳句

冬の月。梅

寒梅に干菜かけたる山家かな
よく晴れて目白鳴きかふ谿の梅
蕙織る納屋の戸さむし冬の月
鉢の梅枝垂れてつけし花一つ
冬の月水晶の如く澄みにけり
薬をうつ頭上に更けぬ冬の月
傘さして梅の日和となりけり
捨てし湯の湯気うすくと冬の月
梅が香にふりかへりつゝ文使ひ
麥ふむや山ふところの梅白く
光りつゝ瀬の音たかし冬の月
雪こほれ來て空くらし梅林
飴賣のはやして過ぎし野梅かな
梅園や塵あつめあるひところ

前田猶春選

那珂 巖郷 高部 樂風
同 青木 青風
行方 武田 塙 草風
久慈 賀美 中野 生
北相馬 東文間 堀越 正直
行方 武田 境 いさむ
東茨城 小松 園部 保彦
北相馬 高野 倉持 公太郎
東茨城 石崎 引田 樂天
新治 七會 高平 寛
那珂 野口 西村 小雨
行方 武田 鳥次 ゆた香
西茨城南川根 小沼 與志男
新治 眞壁 宮木 吐月峰

秀逸

梅くらく淺間は鳴れる雲の中
(賞) 行方郡武田村 鳥次ゆた香

米で年中暮す大地主
風呂敷に小米を買つて貞女なり
米穫れて豫想の非難どこへやら
食ふだけを残して地主米を賣り

十秀

米俵擔ぎ合つてる馬鹿力
米のない事を病人知つてゐる
とてもよく似合ふ丸齋米をとぎ
米といでといで女房世帯じみ
病む母へ明日の米櫃聽かれてゐる
米の値にあきれて餅を二つ焼き
金策へ仕方なく賣る米俵
米作もよいと滿洲移民熱
米俵嬉しく母と片付ける
よく喋る女に米がとかれすぎ

五客

米の値を話し火鉢の火を擴げ
新歸朝つくく米の味を褒め
米屋から隣りの暮し向を聴き
米五勺さげて彼岸へ母の珠數
米櫃が心細くて今日も雨

人(賞)

米賣つて米買つて食ふ小百姓

東京目黒 鳴鳳
東京小石川 虎坊
水戸 佐一郎
大阪天王寺 いさむ
行方武田 昇鯉
大阪天王寺 静香
水戸 徳三
大阪西成 葉光
大阪天王寺 信夫
石川金澤 虎坊
水戸 論山
大連回音街 與志男
西茨城南川根 葉光
大阪天王寺 葉光

東京 王子 村上 亘享
京都 下京 狸公三
京都 王子 亘享
京都 下京 狸公三
大阪 西成 徳三
北海道旭川 よしを

「評」 観梅に竹隈音頭のレコードは選者も汗顔の至りです。ゆた香君の七句の中この一句を最上とします。本誌俳壇開設最初のこととして投句者も少く、他に賞を與ふべき句も見當りませぬ (選者)

選者吟

青天やひとよきささぶ谿の梅
冬暖の畫の月ある寺林
猶春

次號課題

題、『春風』『椿』一人十句以内
締切 四月二十日
用紙 半紙二ツ折
宛名 茨城縣廳内 統計協會宛
賞 秀透三名に粗賞を呈す



柳川

山中緋郎選

新世帯まで米櫃の置き所
米相場上れど賣れぬ子澤山
地卵子がありますとある精米所
米調査坪刈をする旗が立ち
東京日本橋 日進
北相馬東文間 宵雲
大阪天王寺 葉光
西茨城北川根 傳屋

地(賞)
暴落の倉に崩るゝ米俵
東京 王子 日野櫻笑子
米の値へ濟まなく猪口を伏せて飯
北海道旭川 石渡よしを

選者吟

食ふだけの米の中なる小作料
淋しさは米の小買の後ろつき
統計に關する雜詠
新治 柿岡 大久保青村
行方 武田 塙 草風
東茨城 石崎 引田 樂天
行方 武田 境 いさむ
久慈 幸久 宇野 清朗
東京 日本橋 雉野 鳴鳳
西茨城南川根 小沼 與志男
東京 小石川 中村 駿府
北海道 旭川 石渡 よしを
石川 金澤 中庄 信夫

統計川柳募集

課題「藪」用紙葉書一人五句以内
山中緋郎選

締切 四月二十日
宛名 茨城縣廳内茨城縣統計協會

編輯後記

梅見頃、土の匂ひはいよ／＼高い——春だ春だ、躍進の春だ、萬物悉く春の景物にやみがへるのだ。

梅は嚴冬に蕾を孕んで花の魁けをなすところに清節は謳はれる、わが「茨城統計」もまた酷寒に耐えて早春第一の花を咲かせ、今また第二輪を皆様にお目にかける、もとより梅花の芬芳にまだ比すべくもない。所謂梅妻鶴子の風流などとても及びもつかないが、「茨城統計」には誇るべき大きなベツクがある。世の何物にもかへがたい貴い使命がある。春をたゞへて活潑に奮闘努力、更に一段の装ひを凝らして第三の花を第四の花をお目にかけることにしよう。

本號はおかげで材料も豊富で、大變編輯もしよかつたが、それがために關本の池田氏をはじめ各方面から寄せられた折角の玉

稿を次號に移すのやむなきにいたつた。悪からず御諒承を願ひたい。

本誌短歌の選は丹四郎君が引受けて下さることになった、丹君は眞摯なる短歌の研究者であり、清新なる詩藝の持主である。縣下歌壇の第一人者といつてよからう。俳壇は前田香徑子が擔當し、川柳は山中耕郎君が受持たれるし、やがて縣下の文壇に「茨城統計文藝」の名を印象づけるのも遠くはあるまい——(富岡如夢)

茨城統計と

廣告の効果

「茨城統計」は縣下三百八十ヶ町村及び各市町村の統計調査員三千九百名は勿論縣下各種団体、會社、工場等に配付し、中央各省、道府縣へも漏れなく配付するものにて廣告の効果偉大なるものがあると信じます。

□本誌廣告料金は左の通りです。

特別(一頁(表紙裏表)) 金貳拾圓  
 (半頁(同)) 金拾五圓  
 普通(一頁) 金拾圓  
 (半頁) 金五圓  
 (四分ノ一) 金參圓  
 □同一廣告を引續き二回以上のときは二割の割引をします  
 □廣告に寫眞挿入又は木版を要するものは其の費用を別に申受けます  
 □廣告料は前納に願ひます  
 茨城縣廳  
 茨城縣統計協會

昭和十年三月十三日印刷  
 昭和十年三月十五日發行  
 (隔月一回十五日發行)  
 一部金拾錢  
 水戸市北三ノ丸茨城縣廳  
 茨城縣統計協會内  
 發行兼編輯人 川崎末吉  
 印刷人 水戸市南三ノ丸一〇七ノ二 柴印  
 印刷所 水戸市南三ノ丸一〇七ノ二 柴印 所  
 發行所 水戸市北三ノ丸 茨城縣廳内  
 茨城縣統計協會